



Title	ジョゼー・リンス・ド・レーゴ : 政治記者時代とG・フレイレの影響
Author(s)	岐部, 雅之
Citation	ブラジル研究. 2010, 6, p. 51-69
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106519
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ジョゼー・リンス・ド・レーゴ

ー政治記者時代と G・フレイレの影響ー

岐部 雅之¹

はじめに

20 世紀のブラジル文学を代表する作家ジョゼー・リンス・ド・レーゴ(José Lins do Rego: 1901-1957)は、文壇に登場する 1932 年以前からジャーナリズムの世界に身を投じ、精力的に文筆活動を行った²。特に、保守派の政治記者およびコラムニストとして頭角を現す 1920 年代初頭、彼は国内外の文学や絵画、演劇、音楽など芸術分野に幅広い関心を示す傍ら、思想を異にする政治家や知識人とは論争すらいとわなないラジカルな一面も持ち合わせていた。当時は専らジャーナリズムに没頭し、レシーフェ法科大学でも学問に勤しむことはなく、卒業するまでボヘミアンな言動を繰り返していたという³。

ところが、欧米での遊学を終えて 1923 年に帰国したジルベルト・フレイレ(Gilberto Freyre: 1900-1987)との邂逅によって、レーゴは初めて「反政府の記者

で政治パンフレットに熱狂していた」(Rego 2004: 50)自分の行動を省みる機会を得る。「政治に関わる自分の計画を放り投げた。雄弁家になることも思いとどまった」(Barbosa 1991: 63)と告白する彼は、「ブラジルの文学史における固い友情の内の一つ」(Menezes 1944: 58)と言われるほどフレイレと親密な関係を構築していく。以後、北東部で代々受け継がれてきた伝統の再興に尽力するフレイレの地方主義運動に共鳴し、豊富な海外経験を持つ博覧強記の親友を「師匠」や「先生」とも呼んだ。その結果、レーゴがフレイレの「敬虔な弟子」(Stegagno-Picchio 2004: 529)と象徴的に見なされるようになったことは広く知られている。

1923 年以降の交流が、レーゴの人生の分岐点と位置づけられてきたのは、フレイレへの惜しみない敬愛の念に拠るところが大きい。これまで論文や研究書で議論されてきた二人の関係についても、感情的なレーゴの証言に偏り過ぎたきらいがあり、客観性に欠ける印象は否めなかった。さらに、レーゴの“変貌”ばかりに焦点が当てられ、フレイレと知り合うまでに新聞に掲載された記事やコラムが看過されてきたのも事実である。師匠と弟子という従属的な関係に違和感を覚えた当事者フレイレでさえ、政治記者時代のレーゴを「粗野な地方出身者」(Freyre 1982: 182)と思っていた。したがって、フレイレがレーゴとの対等な関係を主張すればするほど、浮かび上がってくるのは「粗野な地方出身者」の道標となった自らの貢献と揺るぎない自負にほかならない。

本稿では、レーゴが政治記者時代に発表した記事に注目することで、彼の地方主義に対する見解を明らかにし、それがフレイレによってどう影響されたのか考察したい。そこでまず第 1 章では、時代背景となる 1920 年代のペルナンブーコ州社会とジャーナリズムを概観する。つづく第 2 章においては、レーゴの文筆活動について述べると同時に、記事から読み取れる地方主義への意識を論じる。そして第 3 章では、具体的な事例に即して、フレイレがレーゴの「敬虔な弟子」像を作り上げていく過程に言及する。

第1章 1920年代のペルナンブーコ州社会とジャーナリズム

政治記者時代のレーゴが州都レシーフェ市で目の当たりにした現実、昔ながらの街並みが損なわれた「すっかり悪趣味なレシーフェ」(Rego 2004: 49)であり、資本主義社会への移行に伴う急速な都市化と工業化が進む過渡期の混乱だった。なかでも、ペルナンブーコ州政治は、大統領ヴェンセスラウ・ブラス(Wenceslau Brás)内閣の農業大臣も務めた知事ジョゼー・ベゼラ(José Bezerra)の病死によって、後継をめぐる二大派閥の対立に揺れていた。すなわち、元州知事で上院議員のマヌエル・ボルバ(Manuel Borba)率いるボルバ派と、ペッソーア・デ・ケイロス(Pessoa de Queirós)一族が指揮するペッソーア派の政治抗争である。

地方の自治権を主張するボルバ派は、1825年創刊の由緒ある新聞『ペルナンブーコ日報』(*Diário de Pernambuco*)と並び、地方主義思想を持って連邦政府の干渉主義に激しく反発した。他方、ペッソーア派は『商業新聞』(*Jornal do Commercio*)を所有し、親類関係にあった大統領エピタシオ・ペッソーア(Epitécio Pessoa)の支援を得て、政府との連携を深めながら州内において中央集権重視の政策を展開した。

それぞれの派閥がイデオロギーを浸透させるために利用したのが、政治的なプロパガンダとしての新聞や雑誌である。この時期のペルナンブーコ州を取り巻くジャーナリズムの状況について、ブラジル文学研究者アゼヴェード(Azevedo)はソウザ・バロス(Souza Barros)の『ペルナンブーコにおける20年代』(*A década de 20 em Pernambuco*)から、次の一節を引用している(Azevedo 1996: 19)。

当時、ジャーナリズムは広報活動として、こんにちよりも遥かに権力を集中させていたことに注意を払わなければならない。知識人はいかなる活動においても、直接たずさわるか、もしくは共著者として作品を公表しジャーナリズムで脚光を浴びなければ、本物の知識人とは認められな

かった。

その意味で、北東部に近代主義運動の種を蒔いたジョアキン・イノジョーザ(Joaquim Inojosa)は、ペルナンブーコ州のジャーナリズムをにぎわせた知識人の一人と言える。レシーフェ法科大学でレーゴの級友だった彼は、『レシーフェ新聞』(*Jornal do Recife*)でも同僚として記者活動をしていたが、ペッソーア派の思想に惹かれ『商業新聞』へと移った。そして、サンパウロ市で知り合ったマリオ・デ・アンドラーデ(Mário de Andrade)ら近代主義者⁴に感銘を受けて以降、ボルバ派のレーゴと袂を分かって新聞紙上で論争も交わした。

1922年10月30日、イノジョーザはレシーフェ市の新聞『午後』(*A Tarde*)で「未来主義とは何か」(“Que é futurismo”)を発表し、北東部における芸術的刷新の必要性を訴える。当初は周囲から冷ややかな反応を受けるものの、同記事で使用された「懐古主義者」(*passadista*)と「未来主義者」(*futurista*)の2つの用語は、1924年頃までジャーナリズムの流行語となり、近代主義思想をめぐる議論のきっかけを生んだ。

一方、レーゴはペルナンブーコ州の内陸部でボルバ派の応援演説をしていた際、『ペケーノ新聞』(*Jornal Pequeno*)の記者オゾーリオ・ボルバ(Osório Borba)に出会う。間もなく意気投合した二人は、暫定の州知事セヴェリーノ・マルケス・ピニエイロ(Severino Marques Pinheiro)を嘲笑する政治小冊子を作成したあと、1922年11月1日には週報『ドン・カズムーロ』(*Dom Casmurro*)を創刊するに至った。彼らは、華やかな南東部ばかりに目を向け、北東部の現実に疎い知識人を厳しく非難し、新たな思想を受容するときには熟慮を重ねる方針を同紙で打ち出している。

地元政治家たちから助成金を得て刊行していた『ドン・カズムーロ』において、レーゴとオゾーリオ・ボルバはペッソーア派の政治家たちをこき下ろす記事をたびたび掲載した。1922年に州知事に当選したセルジオ・ロレト(Sérgio Loreto)や、元州知事でロレトの後継者として政権を握るエスタシオ・コインブラ(Estácio Coimbra)への反発は、やがて州政府側との摩擦を引き起こ

す。そのため、1923 年 4 月 30 日、警察当局による印刷工場襲撃で『ドン・カズムーロ』の第 26 号が発行直前で押収され、廃刊に追い込まれてしまった。彼らの記者活動は、敵対する政治家たちの弾圧によって、中断を余儀なくされたのである。

レーゴの反政府的行動はこうした騒動のみならず、親交を温めつつあったフレイレの生活にも少なからず影響を与えている。それはセルジオ・ロレット知事から公立ペルナンブーコ図書館の館長就任を打診されていた件で、フレイレは申し入れに前向きな姿勢を見せていたが、レーゴと行動を共にしないよう州政府から圧力をかけられたこともあり受諾できなかった。彼はレーゴと異なり、ペッソア派を支持していた関係で、1927 年にコインブラ州知事の秘書官に就任したものの、政府から依頼された仕事を引き受けることについて、親友への書簡で複雑な胸中を吐露している(Figueiredo Jr. 2000: 74-75)。

1920 年代のペルナンブーコ州では、政治的なイデオロギーの対立を背景として、南東部より導入された未来主義を契機に、地元の伝統や文化に対する価値観を見直す運動が盛んに行われた。それはフレイレが北東部の知識人を呼び集めて編纂した『北東部の書』(*Livro do Nordeste*, 1925)や、1926 年に開催する第一回北東部地方主義会議などで実現されていく。ただし、「わたしが望んでいるのは、何よりも、特性を失わずに刷新するレシーフェである」(Azevedo 1996: 134)と言うように、必ずしも、フレイレは懐古趣味を標榜して地方主義を主導したのではなかったことを付け加えておきたい。

第 2 章 レーゴの文筆活動と地方主義

(1) 文筆活動

文才に恵まれたレーゴにとって、新聞や雑誌への寄稿は、小説の執筆と同様に重要なライフワークだった。記者としての活動期間は、学生およびアマチュアの頃を含めれば、『スポーツ新聞』(*Jornal dos Sports*)のコラムである「ス

ポーツと人生」(“Esporte e Vida”)を担当していた晩年まで約 40 年間にも及ぶ。生前最後の記事は 1957 年 7 月 20 日付けで、肝硬変の悪化による入院先の病院にて、友人チアゴ・デ・メロ(Thiago de Mello)に口述筆記を頼みようやく書き上げたものだった(Castro 2002: 20)。レーゴにとって、書くことは情熱であり、執念でもあったことを物語るエピソードである。

レーゴの文筆活動は、故郷パライーバ州のディオセザーノ学院で文学サークルに所属していた 1916 年にまで遡り、奴隷制廃止運動家ジョアキン・ナブーコ(Joaquim Nabuco)に関する小論など数編を学生新聞に投稿したのが始まりとされている。1919 年からはパライーバ州発行の『エスタード日報』(*Diário do Estado*)で記者を務めるようになり、1924 年までに『現代生活』(*Vida Moderna*)、『レシーフェ新聞』、『ドン・カズムーロ』、『新時代』(*Era Nova*)で合計 64 件の記事を発表した。

	1919 年	1920 年	1921 年	1922 年	1923 年	1924 年
1 月	9			4		
2 月	5			4	1	
3 月	1			4		
4 月				4		
5 月		1		2		
6 月		2		3		1
7 月				2		1
8 月				2		
9 月			2	1		1
10 月			5	1		
11 月			4	2		
12 月			3			
合計	15	3	14	29	1	3

上記の表は、ブラガ・ピントの編纂に基づき、6年間に執筆された記事の数を年別に集計したものである⁵。

一見して気付くのは、1921年9月から1922年11月までの15ヵ月間で集中的に活動を行ったことだろう。この期間に書かれた記事は合計43件に上り、全体に占める割合は約67%になる。これはレーゴが『レシーフェ新聞』と『ドン・カズムーロ』に寄稿していた時期に相当し、ジャーナリズムに傾倒するレーゴの活発な様子が窺える。

ほかの年に目を転じてみると、1919年の数字は1921年のそれを上回る15件を記録しているが、1月に9件、2月に5件、3月に1件の記事を『エスタード日報』に書いたきりで継続性があるとは言えず、1920年も再開した5月に1件、6月に2件の記事を『現代生活』に寄稿しただけに過ぎない。『レシーフェ新聞』から「月給40ミルレイス」(Barbosa 1991: 60)を得て日曜日の連載を担当するときと違い、最初の2年はまだアマチュア時代だった。

ところが、1923年2月以降の1年以上にわたる中断期間の原因としては、先述した『ドン・カズムーロ』の廃刊事件のあとだけではなく、フレイレとの交流の始まりが考えられる(Rego 2004: 50-51)。

わたしたちが出会ったのは、レシーフェの、わたしたちが愛するレシーフェのある午後のことだった。それ以降、わたしの人生は別のものになり、関心事、計画、読書、熱情も変わってしまったのである。それは小説のように思われるが、何もかも現実であった。(中略) わたしにあるものは全て、彼を不愉快にさせるものだった。すなわち、不摂生な生き方、関心のある話題、無知な青年の生活である。(中略) わたしたちが出会ったあの午後、文学的な人生が始まった。あの日までわたしは一体何を読んでいたのだろうか？ ほとんど何も読んではいなかった。(中略) そうして、わたしには、もう一つの世界、思想の世界、芸術の世界が生まれつつあった。

この言葉を額面通りに受け取るならば、『新時代』で記者活動を開始する1924年6月までのレーゴの沈黙は、彼自身が駆け出しの政治記者時代を若気の至りと戒めていた期間だと理解できなくもない。実際、レーゴは自分と対照的な博識のフレイレに憧れる一方、自分の出自や過去の言動に対してコンプレックスを抱いていたからである。したがって、フレイレとの付き合いを続けるために、レーゴは政治家や権力者を中傷する従来の論争好きな態度を改める必要性を痛感し、ジャーナリズムから一時的に距離を置くことにつながった。

フレイレと1年余りを過ごしたレシーフェ市では、サン・ジョゼー地区を中心に古い街並みの散策や、カピバリーベ川のほとりに腰をかけての語り合い、大衆的なレストランで昼食や夕食を共にするなど、レーゴにとってかけがえのない日々となった。そうした二人の親密な交友は、上流階級の人たちの間で「悪い冗談」や「風変わり」だと噂され、なかには「友人同士と言うより、愛人関係」とからかう者もいたほどである(Fonseca 2007: 239)。それでも、レーゴがフレイレへの憧れを包み隠さず、1923年を境に生まれ変わったかのように感じていたのは間違いない。

しかし、二人の関係を論じる際に取り上げられてこなかったのは、レーゴが自戒した政治記者時代、あるいはそれ以前からジャーナリズムで公表してきた記事の数々である。フレイレからの影響を考える際、彼と出会うまでのレーゴの活動を明らかにしなければならない。

(2) 地方主義への意識

南東部で近代主義運動が高揚する1910年代後半から、レーゴは時代の風潮を敏感に察知し、伝統的な地方の文化が平準化されていくことに危機感を募らせていた。彼にとって、地方主義の意義は、郷土偏愛や分離主義を乗り越え、ブラジルの各地方で育まれてきた個性的な文化を有機的に統合すること

にあった。

ヨーロッパ前衛芸術に彩られた南東部近代主義への懐疑的な態度は、レーゴが『レシーフェ新聞』に寄稿した1921年11月12日付けの「神秘主義の画家」(“O pintor do misticismo”)⁶における「キュビズムの芸術家や未来主義者たちの当世風のうぬぼれ」(Rego 2007: 104)という批判に表われている。この記事が特に注意を引く理由は、サンパウロ市立劇場で「近代芸術週間」⁶(Semana de Arte Moderna)が開催される1922年2月よりも先立ち、近代主義思想の影響が北東部へも徐々に及んでいたことを示唆しているからである。

同紙では、1922年1月12日付けの「知的交流」(“Intercâmbio intelectual”)においても、「ブラジルがブラジルを知らないのは事実である(中略)リオデジャネイロには、よく知られたブラジルの全てがある」(Rego 2007: 129)と述べ、南東部へ偏重している芸術の評価に懸念を抱く。「自分たちのことに完全に無知」(Rego 2007: 130)な状況では、地域と地域のつながりを模索するなどレーゴには不可能に思われた。

1922年1月1日付けの「若人たち」では、レシーフェ市を拠点に活動する詩人を意識的に取り上げるレーゴの努力が垣間見える(Rego 2007: 121)。

ペルナンブーコの新世代には、偉大なる詩人たちがおり、高貴で詩情豊かな感性がある。(中略)レシーフェの若い詩人たちが持っているのは、短い幸福な青春時代の想像力と精神力である。

多くの詩人が挙げられる中、『レシーフェ新聞』でレーゴの同僚だったアウストロ・コスタ(Austro-Costa)は、「レシーフェで発行されるほとんど全ての雑誌や新聞に出ている」(Azevedo 1996: 34)と言われるほど当地では有名だった。ほかにも、『レシーフェ新聞』の日曜コラムでレーゴの前任者を務めていたバルボーザ・リマ・ソブリーニョ(Barbosa Lima Sobrinho)や、ブラジル文学アカデミーの会員にもなったムシオ・レオン(Múcio Leão)、『ドン・カズムーロ』を共に創刊したオゾーリオ・ボルバラについて言及されている。

レシーフェ市の新聞で彼らの活躍を伝えるレーゴの意図は、「知的交流」に書かれた最後の言葉に集約されるだろう。

我々は自分たちの精神の奥まで洞察しなければならない。そこには、健全な詩人や優れた芸術家の感情と、そして何より、痛苦と喜悅の本質がある。

地方主義という表現こそ使われていないものの、読者に向けられたレーゴのメッセージは、海外から導入される芸術に目を奪われるのではなく、「自分たちの精神の奥」を見つめ直すことにあった。『エスタード日報』で記者を始めた 1919 年には早くも、「コリオラーノ・デ・メデイロス」(“Coriolano de Medeiros”)や「著名なパライーバ人」(“Um paraibano ilustre”)で、同郷の作家メデイロスおよびアシス・シャトーブリアン(Assis Chateaubriand)に称賛の言葉を送っている。また、レーゴの高校時代の教師でレシーフェ市生まれの詩人ファリア・ネヴェス・ソブリーニョ(Faria Neves Sobrinho)を取り上げた「偉大なる詩人」(“Um grande poeta”)では、「パライーバでは、この際立って優れた詩人の驚嘆すべき詩がほとんど知られてない」(Rego 2007: 52)と、地元読者の身近な文化人に対する関心の低さも嘆く。

「近代芸術週間」が催されてから 9 ヶ月後の 1922 年 11 月 13 日、レーゴは『ドン・カズムーロ』で「サンパウロの未来主義者たちが愚かな言動をする間、リオにいる人々はブラジル文化を救う」(“Enquanto os futuristas de S. Paulo fazem ridículos, uma geração no Rio salva a cultura brasileira”)を発表した。本記事では、題名が示しているように、南東部の近代主義運動を一括りに批判しておらず、リオデジャネイロの知識人たちには共感を覚え、タッソ・ダ・シルヴェイラ(Tasso da Silveira)やロシャ・アンドラーデ(Rocha Andrade)らと交流をしている。

つまるところ、レーゴは北東部と南東部の文学空間を単純な二項対立で捉えていたのではなく、「騒動や無知によって、軽率なオリジナリティをでっち

上げる」(Rego 2007: 248)芸術の刷新そのものに反対だった。北東部の地方主義運動はしばしば南東部の近代主義運動と対置されるが、次の引用に見られるように、ブラジル各地方に息づく固有の文化を継承する重要性を彼は認識していたのである(Rego 2004: 52)。

北東部、リオグランデドスル、サンパウロ、ミナスジェライスには、土地があり、人々が住み、特色のあるブラジルの全てがあった。なぜ、大地に揺るぎなく張った根を引き抜くのか。なぜ、我々の持って生まれた感情や価値を軽んじるのか。

アマチュア記者を始めた時期から一貫してレーゴが訴えてきたのは、ブラジルには多様な文化があり、北東部もその一翼を担う地方であるとのことである。にもかかわらず、フレイレの主導する地方主義思想から受けたインパクトを強調し、レーゴは自ら積極的に彼の「敬虔な弟子」となってしまった。それは結果的に、レーゴの記者活動があたかも反政府運動家のみという印象を与えてきた。では、フレイレがレーゴと交流をしながら、どのような影響を及ぼしていったのか、次章で考察して行きたい。

第3章 レーゴの憧れとフレイレの矜持

(1) 相互依存関係の歪み

試論「ジョゼー・リンス・ド・レーゴを想起しながら」(“Recordando José Lins do Rego”)で、フレイレは親友から受け取った書簡の一部を紹介しながら、そこに綴られている自分への並々ならぬ憧れを明かしている⁷。「精神的な奴隷制が存在するのなら、わたしはお前さんの奴隷である」(Freyre 1991: 96)や、「わたしにとって強い郷愁にかられる最良の思い出は、一緒に訪れたパライバへの初旅行である」(Freyre 1991: 101)など、フレイレを敬う表現は枚挙にいと

まがない。

そこで、フレイレが主張しようと試みたのが、相互依存関係である(Freyre 1991: 96)。

わたしが彼から受けた影響と、彼がわたしから受けた影響を通じて、わたしたちは互いに補っている。彼の人生とわたしの人生は、知り合ってから以来、それぞれ異なるものとは考えがたい二つの人生となった。兄弟のように親密な共生のかたちである。そのため、相互の気質を犠牲にすることなく、両者は依存しあった。

彼は、後に執筆した別の試論「ジョゼー・リンス・ド・レーゴとわたし：二人の内のどちらが相手に影響を及ぼしたか？」(“José Lins do Rego e eu: qual dos dois influenciou sobre o outro?”)においても、レーゴの憧れを受け止めつつ、一方的な影響を与えたことには疑問を呈する。なぜなら、帰国後間もないフレイレが「いまのレシーフェにいますと、幾分か自分が外国人だと感じてしまう」(Azevedo 1996: 129)と戸惑っていたときに、故郷への再適応を手助けしたレーゴの貢献があったからである。レシーフェ社会が混迷を極めていた 1910 年代末から 1920 年代初めの期間を海外で過ごしたフレイレにとって、自国に押し寄せていた新たな時代の流れを把握するために、レーゴの存在は必要不可欠だった(Freyre 1978: 34)。

彼を通じて、わたしはブラジルの文学や芸術における若いブラジル人作家や、最新の傾向および方向性に関する知識を得た。相互依存関係と言うのは、そのためである。

彼を称揚するレーゴの感情的な言葉に比べると、フレイレは二人の関係を努めて冷静に判断しようとしている。卑下するレーゴの態度に注意を払いながら、従属的な関係となるのを避けるフレイレの様子が感じられる。

しかし、彼はレーゴから「師匠」と呼ばれるのを嫌う反面、「苦悩した弟子の要求」(Freyre 1991: 108)に応じて作家への道を指し示した指導者でもあったと自負しており、フレイレの提示する相互依存関係には歪みが生じていると言わざるを得ない。特に、レーゴを地方主義運動へと誘う過程には、相互依存とは程遠い「師匠と弟子」の構図が浮かび上がってくる(Freyre 1978: 48)。

ジョゼー・リンス・ド・レーゴには、検察官や裁判官、公務員、弁護士、代議士になることを目指すだけの学生たちとは異なる感性、独創性、知性がすでに備わっていた。ただ、そうした感性、独創性、知性が彼の歩む道筋から逸れてしまっていたに過ぎない。(傍線筆者)

フレイレにとって、齒に衣着せぬ発言を繰り返していた政治記者時代のレーゴは、進むべき道を踏み外していた迷える青年であった。そこで、地方主義運動のエッセンスを文学作品として表現することを期待したフレイレは、『ドン・カズムーロ』などの政治パンフレットで世間を騒がせるのをやめさせ、故郷に根ざした作家を志すようレーゴに助言を与えていったのである。

このように、フレイレがレーゴとの関係について語る言葉には、少なからず虚栄心が見え隠れしている。批評家ルシアーノ・トリーゴ(Luciano Trigo)も、フレイレの文章から感じられる印象はレーゴの従順な姿であると指摘する(Trigo 2002: 55)。相互依存関係の主張に説得力を欠く原因は、「師匠」であるフレイレの矜持と、「弟子」としてのレーゴの過度な謙遜に求められる。

(2) フレイレによる“改宗”と“レシーフェ化”

政治記者から作家へと轉身するレーゴを言い表す言葉として、フレイレは“改宗”と“レシーフェ化”の2つを用いている。前者は、レーゴの習慣や行動がフレイレの望んだように変わっていく意味合いを持ち、なかでも、ジャーナリズムにおける署名の変更、外国文学の耽読、幻の出版となった伝記

が挙げられる。後者は、レーゴの作家活動において、レシーフェ市で培われた経験がいかに欠かせないものとなったか、同時に、当地生まれのフレイレがいかに重要な役割を果たしたかを端的に表現する言葉である。

まず、フレイレは“改宗”の手始めとして、レーゴが政治記者時代に使用していた「リンス・ド・レーゴ」の署名を、「ジョゼー・リンス・ド・レーゴ」とするよう提案した。フレイレの日記(Freyre 1975: 142-143)によれば、「ジョゼー」を付け加えることによって、政治パンフレットに夢中になっていた記者としてのイメージを払拭し、新たな人生の出発点を刻ませることが目的だった。フレイレはレーゴの署名を話題にした日記を2度にわたって書いており、説得に成功したことにも自信をのぞかせている。

次に、1920年代のブラジルでは、あまり知られていなかった外国文学、わけてもフレイレが親しんだ英文学をレーゴに強く勧めたことがある。彼が紹介した作家には、トマス・ハーディ、ラフカディオ・ハーン、スティーヴンソン、ディッケンズのほか、アイルランドのジェイムズ・ジョイスや米国のウィリアム・フォークナーらがあり、それらの作品は、現在パライーバ州ジョアン・ペッソーア市にあるジョゼー・リンス・ド・レーゴ記念館⁹(Museu José Lins do Rego)の蔵書で確認できる。

レーゴとフレイレの共通の友人であったオリヴィオ・モンテネグロ(Olivio Montenegro)は、突如として読書に熱中し始めたレーゴの様子をフレイレに報告し、フレイレもスペイン語やフランス語で海外の小説を読む親友の姿に驚嘆した。そうした読書の末、フレイレは「当時の読書は、デマゴグ、雄弁術、政治パンフレットから彼を決定的に遠ざけた」(Freyre 1978: 43-44)と、“改宗”の手ごたえを感じている。

そして3点目は、レーゴが作家としてデビューする前に書き上げていたと言われる評論とフレイレの伝記を出版させなかった一件である。小説家として文壇に現れることを願っていたフレイレにとって、レーゴが文芸批評家や称賛の言葉で埋め尽くされた自分に関する本を上梓するのは、彼の将来のためには相応しくないとされた(Freyre 1982: 185)。

ジョゼー・リンス・ド・レーゴは、本物の作家として登場するための新たな機会を待つべきである。政治パンフレットの記者であった彼は、新聞や週報へ寄稿した記事で、リンス・ド・レーゴとして定着してしまったのだから。彼の中で政治記者を乗り越える、文学者ジョゼー・リンス・ド・レーゴの作品を望む。そして、彼の最も優れた才能を世間に知らしめるのである。彼のとりわけ秀でた文学的天稟を。

フレイレはレーゴに“改宗”を施すことによって、自分の理想とする作家像を作り上げていった。こうした彼の意図は功を奏し、レーゴが1932年に自費出版した小説『サトウキビ農園の少年』(*Menino de engenho*)はグラッサ・アラニャ基金賞に輝く。そして、1943年に刊行した長編『消えた火』(*Fogo morto*)は、レーゴの畢生の大作として20世紀の北東部文学のみならず、ブラジル文学史における不朽の名作の一つと位置づけられるに至った。

レーゴが小説家として成就する上で、さらに強調されるのはレシーフェ市での経験である。フレイレは「レシーフェなしには、作家としても、一人の人間としても、彼が自己実現することはなかったであろう」(Freyre 1982: 175)と言い、北東部文化の中心地において広い視野を身に着けたことがレーゴを成功へ導いたと確信してやまない。彼の献身的な“改宗”と“レシーフェ化”は、伝統的な地方の文化に対するレーゴの関心を研ぎ澄ませたのである。

おわりに

政治記者レーゴは、反政府的言動を繰り返しながら、ジャーナリズムで論争ばかりしていたのではなく、地元パラíba州およびペルナンブーコ州の作家や芸術家を南東部でも取り上げるよう声高に主張していた。優れた作品を発表したとしても、北東部出身の知識人が南東部へ拠点を移さなければ、評価の対象になることすら困難だったからである。彼が記事の中で挙げた名

前は、ブラジル文学史関連の書籍でも、ごく簡単に紹介されているか、あるいは言及されていないものも数多い。南東部に端を発する文化がブラジルの正統な文化として流布する風潮に異を唱えていたこの頃のレーゴは、事実上、地方主義運動を行っていたといっても過言ではない。

1923 年以降、公私にわたってレーゴの人生に多大な影響を与えたフレイレは、親友を政治記者から文学者へと誘ったことに自負をのぞかせていたが、それによって二人は師匠と弟子という従属的な関係で捉えられてきた。レーゴもまた、フレイレの教えによって過去の自分を省みる機会を得たことに常々恩義を感じており、自身の政治記者時代の活動を過小評価してしまった側面がある。

フレイレが訴えようと試みた相互依存関係にしても、彼の言葉の端々にはレーゴを進むべき道へと案内した虚栄心があるために、結局は齟齬をきたしている。つまり、フレイレは“改宗”と“レシーフェ化”を通じて、「粗野な地方出身者」と見なしていたレーゴを自分の「敬虔な弟子」へと導いたのである。それは、レーゴが元来抱いていた地方への関心を覆い隠す要因ともなった。

¹ 大阪外国語大学大学院博士前期課程修了(2007 年)、京都外国語大学大学院博士後期課程所属。

² レーゴ没後 50 周年に際して、1919 年 1 月から 1924 年 9 月までに書かれた記事が、ブラジル文学および比較文学の研究者ブラガ・ピント(Braga-Pinto)によって編纂された(Rego, José Lins do. *Ligeiros traços: escritos da juventude*. Rio de Janeiro: José Olympio, 2007.)。なお本稿では、上記の期間において最も活発的に記者活動を行った 1921 年 9 月から 1923 年 2 月までをレーゴの政治記者時代とする。

³ 1955 年、レーゴがブラジル文学アカデミー(Academia Brasileira de Letras)の会員に選出されたとき、演説をしたアタイデ(Athayde)は、教室の場所を把握しない、廊下を歩きながら大声で歌う、級友にあだ名をつけてからかうなど、自由奔放なレーゴの学生時代を紹介している。これに加えて、彼が卒業記念写真におさまらなかったのは、撮

影の時間にレシーフェ市のサント・アマール通りでビールを飲んでいたためというエピソードにも言及している(Athayde 1980: 61)。

⁴ サンパウロ市の新聞『コレイオ・パウリストアーノ』(Correio Paulistano)の編集部を訪れたイノジョーザは、詩人メノッティ・デル・ピッキア(Menotti del Picchia)の歓待を受け、オズワルド・デ・アンドラーデ(Oswald de Andrade)を紹介された。その後、画家タルシーラ・ド・アマラル(Tarsila do Amaral)のアトリエや、マリオ・デ・アンドラーデの自宅にも招かれ、近代主義者たちと積極的に交流を重ねた。

⁵ ただし、1922年1月1日付け『レシーフェ新聞』に掲載された「若人たち」(“Os novos”)が、「ペルナンブーコの若人たち」(“Os novos em Pernambuco”)として、同年10月にリオデジャネイロの新聞『新樹木』(*Árvore Nova*)に再録された記事は、表のデータに含まれない。

⁶ 有力紙『エスタド・デ・サンパウロ』(*O Estado de S. Paulo*)は、1922年1月22日付けの記事で、2月11日から18日までサンパウロ市立劇場で「近代芸術週間」が開催されることを報じた。新進気鋭の文学者や画家、彫刻家などが芸術分野の刷新を盛大にアピールし喝采を博したが、同時に保守的な知識人たちとは激しく論争を合した。ブラジル近代主義時代の幕開けを告げる文化的イベントである。

⁷ レーゴとフレイレとの間で交わされた未刊の往復書簡232通に関する調査が、2009年3月21日付けの有力紙『グローボ』(*O Globo*)で大きく報じられ、二人の関係に改めて注目が集まっている。

⁸ レーゴが幼少時代を過ごしたコレドール農園の家財道具や、海外で翻訳された小説、勲章、タイプライター、胸像、親類の写真、フレイレと詩人マヌエル・バンデイラ(Manuel Bandeira)の人物画などが展示されている。1983年開館。

参考文献

- Athayde, Austregésilo de. “Sois um tema literário e humano bastante completo...”. In: *O romance do Açúcar*. Edilberto Coutinho. Rio de Janeiro: José Olympio, 1980, pp.57-73.
- Azevedo, Neroaldo Pontes de. “José Lins do Rego: trajetória de uma obra”. In: *José Lins do Rego*. E. Coutinho & A. B. de Castro (org.). Rio de Janeiro: Civilização Brasileira, 1991, pp.208-224.
- _____. *Modernismo e regionalismo: os anos 20 em Pernambuco*. 2ª ed., João Pessoa/Recife:

UFPB/UFPE, 1996.

Barbosa, Francisco de Assis. “Foi a velha Totônia quem me ensinou a contar histórias”. In: *José Lins do Rego*. E. Coutinho & A. B. de Castro (org.). Rio de Janeiro: Civilização Brasileira, 1991, pp.57-67.

Braga-Pinto, César. “José Lins do Rego: sujeito aos ventos de Gilberto Freyre”. In: *Revista de Crítica Literária Latinoamericana*. año 30, número 59, 2004, pp.183-206.

_____. “José Lins do Rego, o panfletário e o católico”. In: *Ligeiros traços: escritos da juventude*. José Lins do Rego. Rio de Janeiro: José Olympio, 2007, pp.17-35.

Castello, José Aderaldo. *José Lins do Rego: nordeste e regionalismo*. 2ª ed., João Pessoa: UFPB, 2001.

Castro, Marcos de. “Introdução”. In: *Flamengo é puro amor: 111 crônicas escolhidas*. José Lins do Rego. Rio de Janeiro: José Olympio, 2002, pp.19-23.

Figueiredo Jr, Nestor Pinto de. *Pela mão de Gilberto Freyre ao menino de engenho*. João Pessoa: Idéia, 2000.

Fonseca, Edson Nery da. *Em torno de Gilberto Freyre: ensaios e conferências*. Recife: Massangana, 2007.

Freyre, Gilberto. *Região e tradição*. 2ª ed., Rio de Janeiro: Gráfica Record Editora, 1968.

_____. *Tempo morto e outros tempos: trechos de um diário de adolescência e primeira mocidade, 1915-1930*. Rio de Janeiro: José Olympio, 1975.

_____. “José Lins do Rego e eu: qual dos dois influenciou sobre o outro?”. In: *Alhos e bugalhos: ensaios sobre temas contraditórios: de Joyce à cachapa de José Lins do Rego ao cartão-postal*. Rio de Janeiro: Nova Fronteira, 1978, pp.33-55.

_____. “Em torno da recifensização de José Lins do Rego”. In: *Ciência e trópico*. vol. 10, número 2, jun./dez., 1982, pp.175-188.

_____. “Recordando José Lins do Rego”. In: *José Lins do Rego*. E. Coutinho & A. B. de Castro (org.). Rio de Janeiro: Civilização Brasileira, 1991, pp.93-108.

Inojosa, Joaquim. *A arte moderna*. Rio de Janeiro: Livraria Editora Cátedra, 1984.

Madeira Neto, Acilino Alberto. “José Lins do Rego & Gilberto Freyre: similitudes e distinções”.

In: *Monarquia de seduções*. João Pessoa: Manufatura, 2008, pp.17-49.

Menezes, Diogo de Melo. *Gilberto Freyre*. Rio de Janeiro: CED, 1944.

Rego, José Lins do. *O cravo de Mozart é eterno*. Rio de Janeiro: José Olympio, 2004.

_____. *Ligeiros traços: escritos da juventude*. Rio de Janeiro: José Olympio, 2007.

Stegagno-Picchio, Luciana. *História da literatura brasileira*. 2ª ed., Rio de Janeiro: Nova Aguilar, 2004.

Trigo, Luciano. *Engenho e memória: o Nordeste do açúcar na ficção de José Lins do Rego*. Rio de Janeiro: Topbooks, 2002.